

令和6年(2024年)11月18日

豊能町立東ときわ台小学校
校長 張 裕 太 郎

令和6年度(2024年度)全国学力・学習状況調査の結果および今後の取組みについて

向寒の候、保護者の皆さまには、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

平素は、本校教育活動にご理解ご協力をいただき、ありがとうございます。

さて、4月18日(木)に悉皆調査として実施しました6年生の「全国学力・学習状況調査」の結果分析を行いました。本調査は、児童の学力や学習状況を把握・分析し、学校における教育活動の充実や学習状況の改善等に役立てることを目的に、平成19年度より実施されています。本校においては調査人数自体が少ないため、統計の数字だけで「良い・悪い」を判断しづらい面もありますが、課題については、校内で共有し、改善に向けて取組みを進めてまいります。

以下に、今回の結果分析から見えてきた「プラスの面○」「マイナスの面●」および「課題克服に向けての取組み」をまとめましたので、ご家庭でも話題にしていだけますよう、よろしくお願い致します。

なお、豊能町教育委員会による町全体の分析結果は、本町HPにて公表されています。また、全国学力・学習状況調査の問題・調査用紙やその分析結果は、国立教育政策研究所HPで公表されています。それぞれご覧ください。

1. 学力状況調査の結果から

学力状況調査の結果は、国語・算数ともに、府や全国の平均値を上回り、全体通して良好な結果でしたが、引き続き改善が必要な項目もありました。

国語 ○多くの問題で、正答率が府・全国平均を上回っていた。

○記述式の問題については、昨年度に引き続き府・全国平均を上回り良好であった。

○無解答率がほぼ全ての問題で0%であった。また、全ての児童が「全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した」と答えた。

●これまでも課題の見られた漢字については正答率が高いとは言えず、引き続き課題が残る結果だった。

●話し言葉と書き言葉との違いに関する事項について、課題が見られた。

「課題克服に向けての取組み」

◎話し言葉と書き言葉との違いに気付く。

話し言葉には、聞き手や場面の影響を受けながら表現や理解が進められるという特質があり、こうした特質に配慮しながら、書き言葉との使い分けを身に付けるための基礎を養うことが大切である。今後の学習指導の中で、例えば実際の交流を記録した音声や動画を文章に起こした資料を活用する場面を設定するなどし、複雑な構文を避けた表現になっているか、聞き手や場面の状況を踏まえた発言になっているか、などを意識させながら交流するように指導することで、話し言葉と書き言葉との違いを理解できるようにする。

◎文や文章の中で、漢字を正しく使う。

漢字を書くことについては、当該学年の前の学年に配当されている漢字を書き、普段から文や文章の中で使おうとする習慣を身に付けるようにするとともに、当該学年に配当されている漢字を漸次書き、普段から文章の中で使うようにすることが重要である。第5学年及び第6学年は、漢字による熟語などの語句の使用が一層増加する時期であるため、漢字のもつ意味を考えて使う習慣が身に付くようにすることが大切である。そのためには、読み方や字形に注意して繰り返し練習することにとどまらず、自分が書いた文章の中で正しい使い方を習得できるよう、今回の結果を踏まえ、改めて指導していく。また、漢字を使って文章を書く機会を意識して設定し、漢字を活用しながら自分の考えを書くなど、生活に根ざした学習を通して、基礎基本の定着をめざしていく。

◎読書習慣の定着が、「読むこと」の結果にも表れている。今後も指導を継続していく。

算数 ○多くの問題で、正答率が府・全国平均を上回っていた。

○記述式の問題については、昨年度に引き続き府・全国平均を上回り良好であった。

○無解答率がほぼ全ての問題で0%であった。また、多くの児童が「全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した」と答えた。

○これまで課題の見られた算数の基礎基本ともいえる「数と計算」の正答率が、府・全国平均を上回り良好であった。

●昨年度に引き続き、「図形」領域に課題が見られた。

●「変化と関係」については、正答率は府・全国平均を上回っていたものの高い正答率ではなく、課題の1つだと捉えている。

「課題克服に向けての取組み」

◎図形を構成する要素を見だし、それらを活用して必要とするものを求めることができるようにする。

今回の3(3)でいえば、身の回りの形から図形を捉え、図形を構成する要素を見だし、体積を求めるために必要な情報を判断できるようにすることが重要である。学習指導にあたっては、球の形をしたボールがぴったり入る立方体の形をした紙の箱を作ってみることで、球はどこから見ても同じ円であることや、その円の直径の長さは球の直径の長さと同じく、立方体の一辺の長さと同じことを、実体験としても経験し、理解できるようにすることが大切である。

◎「速さ」における意味理解を深める授業づくり

「速さ」は日頃から慣れ親しんでいる言葉ではあるが、「時間」と「道のり」という異種の2種の割合を表したものであり、そのうちの一つが実際には見えない「時間」であるということや、「速い」＝「表す数が多い」という事象ばかりではないこともあり、児童にとっては比較する際に違和感を覚えやすかったり理解しにくかったりし、数量的に表して処理しようとすると容易ではない内容である。

4(3)は、道のりが等しい場合のかかった時間が異なる2人の速さについて、どちらが速いかを判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できるかを問う設問となっている。しかし、道のりが等しい時の速さを時間の短さに着目して比べることに、課題が見られた。学習指導にあたっては、「道のり」または「時間」のどちらかが等しい場合の速さ比べを行い、一方の量が等しい時、もう一方の量がどうなれば速いと言えるのか、言葉、図などを用いて表現させることなどに取り組んでいく。

◎指導方法の工夫改善

・基礎基本は概ね身につけることができおり、これまで課題の見られた「数と計算」の正答率についても良好であった。ただ、学校全体を見た時には、引き続き課題が見られる。反復練習によって体得するものを軽視することなく、算数の土台を強固なものにするためにも、繰り返し基礎的基本的問題に取り組むことを改めて大切にしていく。

・これまで同様、算数の各単元に対して十分な習熟をはかる一方で、課題を見つけて筋道を立てて考え、求め方、理由などを言葉で表現する力、結果をもとに考察する力をつけ、学習したことを文章でまとめる機会を今後も大切に、より多くつくる。また、目的や意図に応じて、理由を明確にし、自分の考えをまとめて文章に書き表す指導をしていく。

2. 学習状況調査の結果から

本校の今年度の学校教育目標は「『なりたい自分を育てる学校』～自律・つながり・挑戦を育てる～」です。児童質問紙から、子どもたちの生活や家庭学習の様子、授業に対する意識の調査結果から見られる特徴に加え、本校の目標と関連の深い項目を中心に取り上げました。これは、保護者・地域の皆さまに、本校の子どもたちの学習の状況をお知らせすることで、本校の教育に更なる関心を高め、地域ぐるみで子どもたちの育ちを支え、今後の充実・発展につなげたいと考えたからです。課題については、校内で共有し、今後も改善に向けて取り組んでまいります。(以下、調査結果を基に本校の分析・考察を述べておりますが、この分析・考察はあくまでも一つの側面です。)

肯定的な意見が多かった項目

○「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」

→これからも、児童自身の日々の振り返りに加え、児童一人ひとりのよい点や可能性を見つけ、積極的に評価していくことを大切にします。

○「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思いますか」

→小規模校となった今、少人数で学ぶことができる、本校の良さの一つが表れた結果であると捉え、今後も大切にしています。

○「将来の夢や目標を持っていますか」

「普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか」

→今後も、全ての児童にとって、夢や目標が持て、普段から幸せであることが感じられるよう、全教育活動を通じた指導を継続していきます。

○「人が困っているときに、進んで助けていますか」

「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」

「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」

→日頃から、学級や縦割り活動、異学年との取組みなどを行っており、また、家庭・地域を含め、自分の周りの人との関わりを持つこともあり、その中で人のために、地域や社会のために頑張りたいと思っている姿が感じられます。また、そのことを適切に学校や家庭、地域で子どもたちにフィードバックできている結果でもあると考えます。

○「学級の友だちとの間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」

「学級活動における学級での話し合いを生かして、今、自分が努力すべきことを決めて取り組んでいますか」

→見解の相違を大切にしながら、他者と対話し学び支え合うなど、教室の仲間とともに学び活動する意識が高いことがわかります。

○「国語の勉強は好きですか」「国語の勉強は大切だと思いますか」「国語の授業の内容はよくわかりますか」

「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役立つと思いますか」

「算数の勉強は好きですか」「算数の勉強は大切だと思いますか」「算数の授業の内容はよくわかりますか」

「算数の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役立つと思いますか」

「英語の勉強は好きですか」「英語の勉強は大切だと思いますか」

→これらを含む教科学習に関する多くの設問で、肯定的な意見が多い結果が見られました。各教科の授業に対して前向きに捉えられているといえます。これは、これまで授業改善を含む学習意欲を育む取組みを継続して行ってきた成果の表れだと考えています。

○「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」

「授業で学んだことを、次の学習や実生活に結び付けて考えたり、生かしたりすることができると思いますか」

→これまでも取り組んできた「子どもが主体的に学ぶ授業」を意識した授業づくりの成果が出ていると考えます。今後も、児童が目的をもって主体的に学習できるよう、授業改善に取り組んでいきます

○「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）」

→学習習慣や学習の積み重ねが「学力の伸び」につながることから、具体的な改善や取組みとして昨年度から「家庭学習ウィーク」を実施しました。今後も継続して取組みを行っていきます。

肯定的な意見の少なかった項目

●「自分には、よいところがあると思いますか」

→昨年度は高い傾向にあったこの項目については、今年度高くない傾向にありました。否定的な回答をしている児童が一定数いることを受け止め、結果だけでなく、過程を重視する指導を行い、「あきらめずに粘り強く生き抜く力」の育成を図ることが必要であると考えます。

●「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」

→昨年度同様、府・全国平均を下回りました。今回の結果から、授業や活動を通して信頼できる大人であるというメッセージを送り、学校全体として教員と子どものよりよい関係づくりや気軽に相談できる環境整備、子どもに対する相談機能を改めて高めていくことが必要であると考えます。

●「学校に行くのは楽しいと思いますか」

「友達関係に満足していますか」

→全ての児童にとって、学校に行くのが楽しい、と感じられるよう、改めて全教育活動を通じた指導を行っていきます。また、友達関係については、少人数であるが故の人間関係の固着化や、狭い人間関係ということも関係していると考えられます。今後も、様々な活動で、様々な人と関わりながらよりよい関係づくりを構築できるよう心がけるとともに、みんなで話し合いながらよりよい生活を考える取り組みを積み重ねていきます。

●「自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか」

→学習においては前述の通り、他者と対話し学び支え合うなどのともに学び活動する意識が高い結果でしたが、この項目については高くない結果であることがわかりました。発達段階の中で「これが自分なんだ」と考える自我は形成中で、他人の顔色を伺ったり、他人に合わせたりする傾向がどうしても強くなります。嬉しいや楽しいといった感情表現は大人よりも素直に言えますが、意見を言ったり受け入れたりするための軸が弱いことも要因であると考えます。「特別の教科 道徳」などを通じて、他者の言動に対して「自分だったらどうしているかを考えると思うか。」「なぜ、そのような行動をとったと思うか。」について議論を深める学習などを行っていきます。

●「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」

→すべての児童が「いけない」と判断しなければならない項目ではありますが、残念ながら100%の肯定的意見ではありませんでした。今後も、全ての児童が、全ての場面で、いじめはどんな理由があっても許されない行為であるという強い認識を持てるよう、全教育活動を通じた指導を改めて行います。

《課題克服に向けての取組み》

◎一人ひとりが大切にされる関係づくり・場づくり

前述の通り、教科学習や家庭学習に関する質問で、府・全国平均と比べても肯定的な回答の割合が多い傾向が見られ、各ご家庭や学校で取り組んでいること、活動していることが結果として現れていることは、良い傾向であると捉えています。「継続は力なり」とは昔からよく聞く言葉ですが、学びの場である学校では、本年度重点的に取り組んでいる図書館教育などの特色ある取組みと同様に、かわり映えしないかもしれないけれど同じことを粘り強くこつこつと続けていくことも、学力の向上や学習習慣の定着等のためには大切なことであると考えます。これからも「特色ある取組み」と「継続して取り組むべきこと」の、どちらも大切に、子どもたちの学習意欲の向上などに繋がられるよう取り組んで参ります。

一方で、昨年度に引き続き、悩みを先生や学校の大人に相談できると感じている児童の割合は、府・全国平均を下回りました。日頃の何気ない会話や生活アンケート、また SC や SSW など様々な場面等を通して、相談しやすい、相談できる体制を築き、学級担任はもちろん、各学年団・学校全体で一人ひとりのお子さまを大切に見ていく体制を、改めて校内で確認し全教職員で努めてまいります。

◎お互いを尊重する関係づくり・場づくり

今年行われた文科省による「今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会」で「学校は学習をする場だけではなく、学年・学級という生活を共にする集団の中で、多様な他者に出会い、共感や軋轢の中で自己を知り、高めるとともに、他者とのように共存するかという、社会を形成していく上で不可欠な人間同士のリアルな関係づくりを子供たち相互の関係で学ぶ貴重な場」と論点整理されています。

学校は集団で学ぶ場でありますので、自身の思い通りにならないことも多くあり、多様な経験を積むことができる場であります。時には困ることや失敗すること、他者との行き違いやトラブルなどもあり得ます。自分の非を認め謝らなくてはならない場面もあるでしょう。いずれの場合にも大切なことは、互いを尊重する気持ちであると考えます。このことは、先月行いました「いじめといじり」と題した人権講演会において、法の専門家である弁護士の方からも同様のお話が子どもたちや保護者の皆さまにごさいました。今後、お互いを尊重する関係づくり・場づくりについて、学校全体で取り組んでいきます。

一方で、学校が、子どもたちにこれらの経験を積みませ、試行錯誤し、互いを尊重したうえで自分の力で乗り越えていける場であるためには、教職員や保護者の皆さま、地域の方々などの大人が、子どもの成長を信じて見守る姿勢が大切になります。そうした中から子ども一人ひとりが「自分は誰からも大切にされている」と感じ、その中で、豊かな心、確かな学力、健やかな身体が育まれていくのだと考えます。学校の主役は、言うまでもなく、子どもたちです。本校が「子どもが力強く成長できる教育の場」となれるよう、保護者の皆さま、地域の皆さまとの信頼関係や連携を更に強め、今後も「共に子どもの成長を支え・見守る伴走者」となれるよう努めてまいります。